

## 仏典を読む (十三)

# 「烏帽子石」

高橋 伸 一

仏典に改めて接する機会を与えて下さったことに感謝の意を表したい。

私事で恐縮であるが、この春に私は甥を亡くした。まったくの突然の出来事で、何がどうなっているのか理解することもないままに葬儀がとり行われ、一三歳の彼は骨となりこの世界からその肉体を永遠に消した。

この数年の間に、私は恩師、友人、知人という多くの死に会った。そこにはそれぞれの確かな悲しみがあり、私は無常無我の存在性を思いしらされ別離の苦しみを味わされてきた。しかし、この余りにも若い少年の死は、その死の意外性

と血のつながりという重みから私に強烈なインパクトを与えずにおかなかった。

私は本学で、学部、大学院、そして教員とその立場と役割は変化しても、常に仏教という宗教に日常的に接触し、そこから何らかの影響を受けてきた事は確かだろう。それは単に学外者から「佛大人」としての役割を期待されるという客体性から出発したとしても、主体的に私自身の観念の一部に仏教的な何かを定位させてきたといえよう。

この定位は、今振り返ると主要な部分は学部、それも早い回生の時に形成されたようだ。自己の世界観への渴きを満たすべく、キリスト教会や仏教寺院を訪ね、多くの宗教者との出会いを重ねた私である。

しかし、始めに触れたこの春の事件は、私が今までに得てきた仏教の「定位」に新たなゆさぶりをもたらしている。

今までの私の理解してきたそれは、仏教をあまりにも「知識の系列」から接近してきたようだ。自己の世界観を形成する拠り所として、いわば生き方を巡る諸問題を説明し納得する「概念」として応用してきただけでありはしなかったのか、それは基本的に「価値の体系」にある仏教を、倫理と論理性に限定し、そこから抽出される「科学性」のみで満足していたのではないか。だから「一念三千」から「無明すなわち明なり」という弁証法を観することで「理解」したつもりになっていたのではないだろうか。多くの活動的な宗教者との出会いから、彼らの行動力・実践力の背後にあるものを「科学的認識と唯物史観のフレーム」として把握し、彼らの

原点となる「信仰」との連関性は看過していたのではないか。

私のこうした仏教の「理解」から、愛児の「死」に悲しむ姉や義兄の家族をすこしも慰めることなどできるはずもなかった。思明け後の姉から「一息ついて淋しさが、ドッ」と押し寄せたようです。やはり、悲しいし、辛いです。神様、この試練は少しおおきすぎます」と叫びたいです」という手紙に接しても、私に返す言葉がみつからなかったのは自明なことであった。

こうした時に、本書の「仏典を読む」への寄稿を依頼された。複雑な心境でこの偶然の巡り合わせを考えざるを得なかった。ためらいを感じながらもこれを機に「逆縁」という死を仏教ではどのように考えるのか、それへの仏教者の具体的対応は……等の答えが得られるかもしれないという期待で執筆を引き受けたのである。しかし、私の狭い知識ではそのような期待に応えてくれそうな仏典はなかなか見つけ出すことはできなかった。

梅雨のある日、機会があつて東山の清水寺の大講堂を拝観させていただいた。一昨年に落慶された大講堂は、周囲の景観とほどよく調和していた。この大講堂のほぼ中央部に「多宝堂」と称されるビルの三階ほどの高さを吹抜けに建てられた空間がある。二階部分に入り口がありそこから下を覗き見るようなかっこうで底部に設けられている「仏足跡」を拝することが出来る。四面には、約四千の仏様が「マンダラ」を

思わせるように配されていた。天井からのライトが底部の仏足跡に描かれている法輪をはのかに照らし、先代の管長である大西良慶師作曲のシンセが四壁に漂う。今までに経験したことのないこの宗教的な空間に起因するのか、「像観」の経文を私は考えていた。「観無量寿経」にある「観法」すなわち「仏身を観ずる」方法についての記述を思いかえしていた。

「多宝堂」の強烈な印象が醒めないまま、大講堂を出て少し山手を上がつたところの「成就院」の庭園を拝観した。この庭園は「心」の文字を表した池泉がある。中島の烏帽子石はちょうど人が西方に向かって合掌している姿にも映ずる。この烏帽子石の姿と多宝堂の仏足跡。それらによって語られているものはまさに「仏身を観る故に仏の心を見る。その心は大慈悲であり無縁の慈を以て諸の衆生を摂する」ということではないのかと、「観法」の意味を私なりに考えてみた。成就院から清水寺の本堂へ歩き、拝観の人の流れに身をまかせた。子を亡くした親へのメッセージはまだ私にはみつからない。

(たかはし しんいち 社会学部専任講師)

